

2008年北京オリンピックをめぐる聖火リレー報道の日中比較 —ネットニュースはいかに伝えたか—

A Comparative Analysis of Netnews between Japan and China: The Olympic Torch Relay of Beijing 2008 Games of the XXIX Olympiad

中本進一ⁱ・金 英ⁱⁱ

NAKAMOTO, Shinichi and JIN Ying

(要旨)

ニュース報道は国際関係を反映しつつ、刻々と変化する。本稿では、2008年北京オリンピック開催のプレイベントとして行われた聖火リレーに関する一連の報道を取り上げた。チベット暴動における中国政府の姿勢に対し各国からの批判があったことを受け、報道の公平性に批判的アプローチを選択した。主たる研究フィールドとして、ネットニュースを選定し、特に善光寺関連を中心に聖火リレーの表象分析、リレー全般に関する妨害者報道の日中比較、さらには日本語報道における批判的ディスコース分析の3面からの分析を試みた。これらの分析により、日中関係の不明瞭さやそれを反映する報道における相対性の欠如が明らかとなった。

キーワード: 北京オリンピック、聖火リレー、ネットニュース、修辞法、批判的ディスコース分析

I. はじめに

2008年8月8日は、中華人民共和国（以下、中国）にとって、歴史的な一日となった。夏季オリンピックが北京で開催したからである。かつては、1964年に東京オリンピックが開催された際にも、歴史的と謳われたが、これは東洋で開催される最初の近代オリンピックであったこと、また、1940年に五輪開催権を獲得していた「東京」が、日中戦争の進展と国際情勢の悪化を機に取りやめとなり、第2次世界大戦を経て国際舞台に復帰した日本開催のオリンピックであったことにその意義が集約されていたからであろう。

今回の北京オリンピックは、「東西文化の交流」、「緑の五輪」、「発展途上国初の五輪」、「節約型五輪」を開催テーマとして掲げ、急成長を遂げる中国の存在が国際社会で認められ誘致のきっかけとなったのである。まさに中国が国際社会に求められている環境と節約という概念が開催企画の意義を生み、それに世界が応え、言説構築の結果となった。換言すれば、文化の生成に成功したといえるのであるⁱⁱⁱ。

四川大震災等の自然災害対応や昆明でのテロによるバス爆破事件、その他、テロ警戒の警備等の障壁にもかかわらず北京五輪は無事に最終日を迎えた。今回の五輪は、22の新設会場を含む37会場を使用

ⁱ 埼玉大学国際交流センター教授

ⁱⁱ 短期交換留学プログラム学生・済南大学

ⁱⁱⁱ カルチュラル・スタディーズにおける「文化」の定義は'Culture is the production and circulation of meaning.'といわれるものであり、筆者等はオリンピック誘致活動を一種の文化政治学として捉えている。

し、大会運営費は約 16 億ドルといわれる規模の大きい大会であったが、招致が決まった 2001 年は中国にとっては、WTO（世界貿易機関）への加入を決定した年でもあり、21 世紀が中国の世紀といわれる所以ともなっている。中国は 20 年余りの空白時代^{iv}を経て IOC への再加盟を果たしただけではなく、五輪を開催できるまでの国際復帰を果たしたのである。国政的にも、その経済波及効果、国民的求心力、国際的地位の向上という大きな意義を有するオリンピックになったと言えよう^v。

しかしながら、オリンピックの表象、更に言えばナショナリズムを超越した平和の象徴のひとつである聖火が抗議の的となったこと、即ち、妨害されたことは、一方的な見方をすれば、平和とは言えない中国がオリンピック開催に相応しい国ではないというレッテルを貼られる結果となった、とも捉えられる。ただ、相対的な見地からは、それが人権問題に対する批判なのか、宗教問題的な抗議なのか、民族問題の衝突なのか、政治問題（内政）なのかは一概には言えない。むしろ複合的な理由が介在すると考えたほうが自然であろう。聖火への抗議は、「国境なき記者団」（英語名：Reporters Without Borders）による 3 月 24 日の聖火採火式での抗議・妨害行動に端を発し、その後、ロンドン、パリ、サンフランシスコ、クアラルンプール、長野、ソウルと飛び火していったのである。その中でも、日本にいる我々にとっては、長野で行われた聖火リレーにおいて、善光寺がスタート地点として拒否したことは最も印象深い出来事のひとつであったと言えよう。

本稿は、この聖火リレーへの妨害行動をネットニュースが如何に伝えたかについて、日中の国際比較を試みるものである。オリンピックは、その理念に反するとはいえ、通常、国家的（国民的）アイデンティティが前面に出てくるイベントであることから、中国のような多民族・多文化国家においては、一連のチベット報道に見るとおり、少数民族のエスニックアイデンティティとの摩擦や折衝があった場合クロージングアップされることは逃れられないと考える。しかしながら、その報道内容に問題を残していなかったであろうか。メディアの相対性・公平性は如何に評価されるべきであろうかについて議論を深めたい。

II. 研究方法と目的

報道メディアの中でも、ネットニュースは事件報道における即時性及びアーカイブによる継続性に加え、関連記事やリンクの掲載頻度も高いことから、インターネットを本研究のフィールドとした。具体的には、先ず「チベット問題」「聖火」「オリンピック」等をキーワードとして設定し日中のニュースメディアからデータ収集を行った。チベット問題と聖火で取り上げた主要サイトは、日本側報道では MSN 産経ニュース、朝日ネットニュース、読売ネットニュース、YAHOO ネットニュースなど、中国側報道では新華ネット、北京新聞ネット（京報ネット）、中国 CCTV 中央テレビネット、百度ネットニュースなどである。さらにオリンピック関連の記事に関しては、オリンピックのプル要因である JOC（日本オリンピック協会）のサイトに加え、旅行会社のサイト等も参考にした。なお、本稿に掲載する URL は、全て 2008 年 4 月 15 日から 9 月 22 日までの間に閲覧したものである。

研究目的を、聖火リレー問題に関する日中報道比較分析とし、以下の要領で 3 方面からの分析を試みることとした。

- 〔1〕 善光寺が聖火リレーのスタート地点として辞退したことの意味について分析を行う。
- 〔2〕 聖火リレー問題における妨害事件の日中両国の報道における比較を行うことで、両国の報道における相違点を明確化する。

^{iv} 清川正二（1987）「スポーツと政治」ベースボール・マガジン社、p.234

^v 中国旅行代理店－桂林中国国際旅行社 <http://www.arachina.com/news/2008/index.htm>

- [3] 聖火リレーに関する日本語のネットニュース記事の批判的ディスコース分析を用い、報道の公平性・相対性を評価する。

III. 善光寺とオリンピック聖火リレー

日本を含む西洋諸国にとって中国政府のチベット暴動問題の対応が、人権迫害問題と捉えられ中国政府を批判するに至った。この状況に加え、チベット地域の暴動事件に対する抗議行動が各地で相次いだ。同じ仏教信仰の見地に立つ善光寺は、オリンピック聖火リレーのスタート地点を寺の境内とした IOC の決定から辞退したいと長野市の聖火リレー委員会に要望し、受け入れられた経緯がある。

3-1 日本社会における善光寺

日本には昔から「牛に引かれて善光寺参り」という言葉がある。それは自発的ではないにしろ、思いがけないことが縁で、又は自然な流れの中で偶然に良い方向に向かうことを意味する言葉でもあり、ここで登場する善光寺は大きな意味を持つ。善光寺は日本における仏教文化で言うと、心の中の仏心の目を開かせ、仏恩が偉大なことを教え、我欲を捨てて信仰の道へ入ることができ、亡くなった後には極楽の世界に行けるといったような意義を持っている象徴的なところであり、訪れるという行為自体が巡礼的な意味を持つ場所である^{vi}。そういう意味では、日本人にとっての善光寺は、中国国民にとっての万里の長城と、北京故宫の地位に匹敵するのかもしれない。善光寺は日本への仏教伝来の源流に位置付けられている^{vii}。善光寺は、昼夜を問わず、宗派を超えて開放し信者を受け入れ、庶民の心の拠り所となってきたし、老若男女や宗派を越えた信仰の幅も広い日本有数の仏教建築でもある。江戸時代から、「善光寺参り」は庶民の憧れであった。世界遺産への登録を目指している善光寺は、現在、日本政府の暫定リストにも名乗りをあげ、文化審議会の審議などを経て日本政府の推薦文化物として所定の書類をユネスコ世界遺産センターに提出する段階となっている。

3-2 善光寺が聖火リレーを辞退した理由

それではなぜ善光寺は、聖火リレーのスタート地に決定された際には、積極的に受入れたにもかかわらず、4月18日になって、態度を急変させたのであろうか。これについて福山大学で教鞭をとる田中秀征教授は次のような理由を述べた^{viii}。初めは、抗議活動が激しさを増して、数多い国宝や重要文化財などに傷がつく恐れがあること。「万が一の危険があったら」と、慎重になることはやむを得ない。当日は連休の初日で、また、今年の善光寺は重要文化財の山門が修復され特別拝観も予定されている。26日にもし何か起きれば、連休全体の参拝に影響を与えかねないという理由などが挙げられている。

善光寺辞退の2番目の理由は、中国政府のチベットへの対応が五輪憲章に反しているということが挙げられる。また、チベット族の人権への弾圧が行われていることについて同じ仏教徒として憂慮したことも挙げている。即ち、チベット仏教と日本の仏教はそれぞれの伝達経緯が異なるが、どちらもお釈迦の教えを伝えることでは変わらないということで、善光寺側もチベットをめぐる騒乱などを憂慮するに至った^{ix}。

^{vi} 「牛に引かれて善光寺まいり」 <http://w1.avis.ne.jp/~wakaomi/enki/> (avis ホームページ)

^{vii} 「ご本尊 善光寺式阿弥陀三尊像」 <http://www.zenkoji.jp/about/index2.html> (善光寺)

^{viii} 「善光寺の聖火リレー辞退～中国に望む二つのこと」

http://www.nikkeibp.co.jp/style/biz/column/shusei/080424_76th/ (日経 Bp net)

^{ix} 「日本善光寺放弃成为奥运火炬接力起点」 <http://www.fjxw.net/newsfile/2008/4/18/15549.html> (中国佛教新闻网)

善光寺の聖火リレー拒否を受けて、前述の田中秀征教授は、次のように述べている。

「中国政府はこれを機会に、事実をありのままに報道すること、そしてダライラマ 14 世と未来志向の対話に踏み切ること、この 2 つを実践してほしい。中国にとっても、これによるプラスは、これをしないプラスよりはるかに大きいのだ。ダライラマ 14 世は、チベットの分離・独立を掲げていない。北京オリンピックの開催も支持している。ならば話し合いの余地はあるはずではないか。自治、自立への決意が、あらゆる民族の誇りの源泉である。“他民族支配”は一時的にはともかく、長期的には決してうまくいかない。コソボ、南アフリカしかり、旧満州国もそうであった。」^x

しかしながら、中国側から見れば、こうしたものは到底受け入れられない理由と独自の見解もある。

「1965 年から 2004 年にかけての数十年間、中央政府の配慮のもとで、チベット地区は中国中央政府から財政補助金累計 968.72 億元（日本円で約 13838 億円）を配給され、地域の経済発展やチベット民族の教育と育成に役立てた。さらに、中央政府のほかの地方地域の財政からも一部を削ってもらい、チベット地域の農牧民の生活状況を改善と義務教育や農牧地域の医療制度、最低生活保障制度の普及に役に立たせし、計画的生育、経済発展や社会文化政策面につき、チベット民族はほかの 54 の少数民族と同様に国家の優遇政策と待遇を享受していた。このような国からの優遇政策はチベットの社会や経済を発展させ、連続 7 年 12%以上の発展率を保持していた。」^{xi}

といった議論である。ただ中国政府とチベットの問題議論に踏み込むことは、本稿の目的ではないので、これ以上は触れないことにする。しかし、この問題が契機となって西側諸国の聖火リレー妨害問題に発展したことは明白な事実である。

政府レベルの報道を見ても、西洋諸国ほど、日本は中国に対して強い抗議的なメッセージも報道もされていないが、日本の仏教文化において巡礼の聖地である善光寺が聖火リレーを拒否したことは、暗に日本が中国政府を拒否したことと同じ重みの意味を持つと言って過言ではない。少なくとも非暴力による抗議であったと筆者らは分析する。しかしながら、ナショナリズムを超越した理念を持つオリンピックに宗教が関与したことで問題が複雑化したということも出来るのである。

IV. オリンピック聖火（リレー）の歴史と意義

オリンピック聖火は国際オリンピック委員会の認定を受けて、ギリシャのオリンピアで点火されるものである。伝統的なオリンピック聖火の点火式は古代ギリシャからの伝承であるゆえ、火はギリシャ神話の中で神聖なものとして扱われ、古代オリンピックの時からヘラ神殿の前で点された。4 年ごとに行われているオリンピックの開催の前は必ずこの儀式を行っている。^{xii}

国際オリンピック委員会の聖火リレーに関しての全世界での調査報告によると、オリンピック聖火リレーが象徴する価値観は全世界の人々から普遍的に賛美されてきた。即ち聖火リレーは希望で満たされ

「仏教」<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%8F%E6%95%99%E6.AD.B4.E5.8F.B2>（ウィキペディア フリー百科事典）

^x 日経 BP-net 連載コラム：田中秀征一言啓上：

http://www.nikkeibp.co.jp/style/biz/column/shusei/080424_76th/index2.html

^{xi} 「西藏問題不是民族问题」http://news.xinhuanet.com/politics/2008-04/26/content_8052706.htm（新华网）

^{xii} 「奥林匹克火炬接力的历史和传统」

http://www.beijingdaily.com.cn/xwzx/tyay/zt/bjayhjcd/lsbj/200803/t20080319_447396.htm（京报网）

たメッセージを全世界に伝えるものである。

オリンピック聖火リレーに対する妨害行動は何も第 29 回に当たる北京が初めてであったわけではない。今回に至るまでオリンピック聖火リレー及びオリンピック開催もさまざまな理由でボイコットなどの形で妨害されてきた。

- 第 11 回ベルリンオリンピック：1932 年、国際オリンピック委員会はベルリンをオリンピックの開催地に決めたが、これは国際オリンピック発展の中での悲劇であり、歴史的エラーであった。1916 年オリンピック開催地であったベルリンが戦争の策源地であった。当時、ナチスヒットラーはオリンピックを「ユダヤ人と平和主義者たちが演じた小細工である。」と思っていた。1933 年、ナチスヒットラーがドイツ政権を奪い、ドイツの国情は深刻化した。当時の国際情勢から、オリンピック委員会はベルリンでの開催を検討するために調査委員会も設立した。しかし、委員会はナチスのユダヤ人に対する迫害、軍備拡充など、罪悪行為に気付いていながらも、ベルリンがオリンピック開催の条件を備えているという認定を下したのである。アメリカ、フランス、イギリス、スペインなどの国ではベルリンオリンピックを反対し、ベルリンの代わりに開催地をバルセロナにしようと積極的に活動した。しかし、バルセロナでの開催を目前にしてナチスの騒動分子らによって大会が破壊されたそうだ。ベルリンオリンピックはヒットラーの宣伝と表面的な欺きに過ぎなかったのである。そして、開幕式の日、会場に漂ったのは五輪の旗ではなくナチスの旗であった^{xiii}。
- 第 22 回モスクワオリンピック：旧ソ連軍がアフガニスタンに侵入し、国際法の原則を無視したことがオリンピックの開催に大きな影響をもたらした。一つの国家が一方では平和と友誼を目的とするオリンピックを主催しようとし、もう一方では軍隊を派遣してほかの国を侵入しようとしていたことは必ず世論の反対を受けるものであった。西側を中心とした多くの国はオリンピックへの参加をボイコットした^{xiv}。
- 第 25 回バルセロナオリンピック：抗議者たちによって聖火が消される事件が起きた^{xv}。

このように、平和の象徴である五輪や聖火もその背景には、民族問題や国際問題が存在し、勝ち取られた平和を基盤として成立していることが分かる。

すなわち、今回のオリンピックに至っては、冷戦後を強く反映する性質を持っていると考えられる。冷戦中は、アメリカとソビエト連邦という 2 大勢力を中心とする、国家のアイデンティティの衝突がボイコットという結果を導いたが、冷戦後は全く異なるパラダイムでオリンピックが開催されている。例えば、シドニーオリンピックの開会式においては、南北朝鮮の合同行進やインドネシアから開放された東ティモールの選手団、アボリジニの選手 Cathy Freeman による最終点火がクローズアップされ、冷戦後を強く意識し民族的アイデンティティをテーマに成功したと言えよう。その意味において、北京オリンピックがチベットの独立運動が冷戦後の潮流に逆行している点で批判を受けたと意味づけすることが出来よう。

^{xiii} 1936 年第 11 届柏林奥运：黑明星照亮“黑暗”奥运

(<http://sports.sohu.com/2004/02/10/17/news219021767.shtml>)

^{xiv} 1980 年第 22 届莫斯科奥运会：一次残缺的奥运会 (<http://sports.sohu.com/2004/02/10/52/news219025296.shtml>)

^{xv} 第二十五届巴塞罗那奥运会(1992 年) (http://news.xinhuanet.com:80/olympics/2007-07/06/content_6338036.htm)

但し、妨害が何を目的としたものであるかについての報道はされていない。

V. 聖火リレー妨害に関する日中報道比較

ここからは、海外ルートの聖火リレーにおいて、実際に報道された日中両国のネットニュースからサンプリングを行い、それぞれの国で如何に報道がなされたかを見る。表1にあるとおり、聖火リレー報道が行われた直後の報道を抜粋し、実施された各都市でのリレー進行状況を要約した。この比較データから顕著なのは、リレーの妨害者に関する詳細情報における相違点である。以下がそれを纏めたものとなる。

- アテネ：「国境なき記者団」による抗議デモは日本では衝撃的に報じられたが、中国側ではその記述が見つからない。
- イスタンブール：中国側と日本側では取り上げた妨害者に相違点が見られる。
- ロンドン：中国側では妨害行動はロンドン警察によって阻止されたことが報道されているが日本側ではデモの容認が伝えられている。また「国境なき記者団」という記述はなく、「少数のチベット独立を支持する人たち」と報道されている点で、日本側報道と異なる。
- パリ：中国側と比較すると日本側の報道のほうが妨害者に関して具体性のある内容となっている。
- サンフランシスコ：中国側報道においての「チベット独立支持者」に対し、日本側ではアメリカの人権団体についての言及がある。
- ブエノスアイレス：中国では「順調」とあるが、日本側は明らかにデモ抗議があったことについて言及している。
- ニューデリー：チベット独立を指示する人という中国側の表現だが、日本側では、インド内の亡命チベット人たちについて伝えている。
- クアラルンプール：中国では「順調」とあるが、日本側では、チベットの旗を掲げた日本人による抗議行動が原因となった騒動からの保護について述べられている。
- 長野：ここで中国側報道においてはじめて「国境なき記者団」について言及されている。
- ソウル：「チベット問題に抗議する人」という中国側の表現に対し、日本側では「100の市民団体」と抗議行動者の多様性について報道している。
- ピョンヤン：「情熱的な歓迎」と中国側は報道している。
- ホーチミン：政府と公衆の歓迎と中国側の報道に対し、日本側では、中断することなしに終了と事実のみの報道となっている。

この比較から明らかなことは、中国側報道では、妨害者に関して殆どの場合具体的な記述がないのに対し、日本側報道では、「国境なき記者団」に始まり、クアラルンプールでチベットの旗を掲げた日本人、人権保護のNPO団体や、市民団体を含めた抗議者の多様性、目的、抗議状況などについて詳細に伝えられていることが分かる。また、中国の報道においては、歓迎されたケースでは詳細に報道されているが、日本側では「歓迎」の表現を使用しているのは、ピョンヤンとホーチミンの場合だけである。これらの報道を比較するだけでも東アジア地区の国際関係を垣間見ることが出来る。

VI. 日本側報道のCDA

前節では、聖火リレーに関する報道に関して、日中のネットニュース比較を行ったが、明らかに両国の間に相違点が存在し国際関係が報道内容に影響を与えていることが判明したといえる。

次に聖火リレーにかかる日本側の報道は、如何に伝えたのかという部分が焦点となる。当然のことではあるが、大衆の目に触れるネットニュースは新聞などの他のマスメディアとほぼ同等の内容を掲載・報道する場合と、簡略化したダイジェスト版を掲載する場合がある。本研究では、特に大手といわれるメディア報道（Yahoo、読売、産経、ロイター等）を取り上げ、聖火リレーの報道に関して、事例の分析を試み、客観性を欠く表現に下線を引き問題定義を行った。即ち中国批判的言説が表現となって記載されている部分に相対性・客観性を高めるための訂正案を提示し、より公平性の高い記事になるかどうかの検証を行うと共に、その分析法として、批判的ディスコース分析「CDA (critical discourse analysis)」を導入した。さらに、野内（2000）は「レトリックは世界をどう『表現する』かに関わるだけでなく、世界をどう『読む』かに関わる営みである。…聞き手＝読み手の視点もそれに劣らず大切だ。現代レトリックは『世界／テキストを読む』認識者の立場を強調する」^{xvi}と述べている。従ってメディア・リテラシーの重要性を意識しつつ修辞法分析を導入することで、聖火リレー報道の解析を試みた。

以下がその分析結果である。

表 1：2008 年聖火リレー妨害者の報道比較

日時	地域	中国での報道	日本での報道
3 月 24 日	アテネ	北京オリンピック聖火の採火式は予定どおりに挙行。（聖火採火式での妨害者らの話題には触れていない状態。）出典：中国網易ネットニュース（3 月 25 日）	国際 NGO「国境なき記者団」。中国政府のチベット自治区での鎮圧に抗議し、人権を踏み躪る国をボイコットしようとしつつ、聖火より人権のほうが神聖だと主張。出典：日本朝日新聞（3 月 25 日）
4 月 2 日	アルマティ	順調に通過。出典：中国国際放送局ニュース（4 月 4 日）	大きな妨害なしに無事に通過。出典：日本山陽新聞ネットニュース（4 月 2 日）
4 月 3 日	イスタンブール	少数の中国境外のチベット独立支持者らによる妨害。（しかし、境外のチベット独立支持者らによるチベットの独立行為は政治上何の役割もないのだと中国社会科学学院アジア太平洋問題研究専門家は陳述。）出典：中国新浪ネットニュース（4 月 4 日）	中国の新疆ウイグル自治区の反政府を支持する少数民族のウイグル族（何名か）による阻害。出典：日本 47 ニュース（4 月 4 日）
4 月 5 日	サンクトペテルスブルグ	順調に通過。出典：在日中国大使館ネットニュース（4 月 6 日）	大きな妨害なしに無事に通過。出典：日本 YAHOO ニュース（4 月 6 日）
4 月 6 日	ロンドン	聖火リレーは応援者たちの歓声と拍手の中で開始。リレー中少数のチベット独立を支持する人たちによって妨害されそうだったが、イギリスの警察の迅速的な制止を受け、聖火リレーは続いて順調に進行。出典：中国新華ネットニュース（4 月 7 日）	世界の注目を集め、アピールしたい人権団体「国境なき記者団」。2 千人態勢で聖火リレーの警備に当たったロンドン警視庁もデモ参加者にむけ「合法的に行うならばデモを認める」という方針を提出。出典：日本朝日新聞ネットニュース（4 月 7 日）
4 月 7 日	パリ	聖火リレー中少数のチベット独立を求める妨害者らによって阻害されたが、当地の警察によってすぐに制止。聖火はフランスの公衆の情熱な歓迎の中を無事に通過。出典：中国騰訊ネットニュース（4 月 10 日）	「国境なき記者団」。環境活動家ら。パリ市庁舎も「世界各地の人権を擁護する」との横断幕を掛けるなど、歩調一致。出典：日本 MSN 産経ニュース（4 月 5 日）

^{xvi} 野内良三（2000）『レトリックと認識』（NHK ブックス 894、p. 10）

4月9日	サンフランシスコ	少数のチベット独立支持者がいたが、聖火リレーは応援の中で予定のとおり順調に進行。出典：中国人民ネットニュース（4月11日）	チベット問題に抗議するアメリカ人権団体の活動家が現地に入り、聖火が到着する前の緊張感を高める予定。サンフランシスコの市議会も「警戒と抗議で聖火を迎える」との決議を可決。出典：日本朝日新聞ネットニュース（4月3日）
4月11日	ブエスアイレス	大きな混乱なしに無事通過。出典：中国 sports ネット（4月12日）	中国政府のチベット問題の対処に抗議する人権団体の集会、約1キロにわたってデモ抗議。出典：日本日刊スポーツニュース（4月13日）
4月13日	ダルエスサラーム	混乱なしに通過。出典：中国人民ネットニュース（4月13日）	混乱なしに通過。出典：日本 MSN 産経ネットニュース（4月13日）
4月14日	マスカット	無事通過。出典：在日中国大使館ネットニュース（4月14日）	平穏に通過。出典：日本高知新聞ネットニュース（4月15日）
4月16日	イスラマバード	無事に通過。出典：中国人民ネットニュース（4月16日）	無事に通過。出典：日本 MSN 産経ニュース、（4月16日）
4月17日	ニューデリー	チベット独立を支持する人らが聖火リレーを阻止しようと試みたが、警察に逮捕され、聖火リレーは続いて進行。出典：中国放送ネットニュース（4月17日）	インドはダライ・ラマ14世とチベット亡命政府の亡命地。亡命チベット人らによる抗議妨害（亡命チベット人数千人が独自の「聖火リレー」を実施、「チベットへ自由を」、「中国の聖火は恥辱の炎だ」と叫びながら、行進）。出典：日本 MSN 産経ニュース（4月17日）
4月19日	バンコク	順調に通過。出典：中国海口夜報ネットニュース（4月19日）	チベット問題の抗議する人がいたが、大きな困難なく、無事に通過。出典：日本読売新聞ネットニュース（4月19日）
4月21日	クアラルンプール	順調に通過。出典：在日中国大使館ネット（4月22日）	チベット支持者の日本人が出現し中国人たちと揉み合いがあり、見地の警察によって保護される事件発生。出典：日本 AFPBB ニュース（4月21日）
4月22日	ジャカルタ	順調に進行。出典：中国北京放送ネットニュー（4月23日）	聖火リレーの開始の前、中国チベット政策に反対するインドネシア人ら約100人が抗議デモを進行。出典：日本 MSN 産経ニュース（4月22日）
4月24日	キャンベラ	少数の妨害者らが妨げようとしたが、すぐ警察によって制止。聖火リレーは楽しい雰囲気の中で進行。出典：中国新華ネットニュース（4月24日）	チベット支援者らのデモ抗議。出典：日本 J AMS ニュース（4月24日）
4月26日	長野	チベット独立支持者と国境なき記者団の人が現場に現れ、聖火リレーを妨害。出典：中国騰訊ネットニュース（4月26日）	国境なき記者団。日本政府が中国のチベット人権問題への抗議行動を容認した民主的な対応を歓迎。出典：日本 MSN 産経ニュース（4月26日）
4月27日	ソウル	チベット問題に抗議する人らの出現。出典：MSN 中国ネットニュース（4月27日）	100の市民団体が「聖火リレー阻止市民行動」を結成し、中国政府のチベットへの武力鎮圧と人権弾圧、脱北者強制送還に抗議する予定。出典：日本 MSN 産経ニュース（4月22日）
4月28日	ピョンヤン	情熱的な歓迎を受け、順調に進行。出典：中国新華ネットニュース（4月28日）	歓迎されて通過。出典：日本朝日新聞ネットニュース（4月28日）
4月29日	ホーチミン	ベトナム政府と公衆の歓迎を受け、聖火の外国でのリレーは順調に終了。出典：中国京報ネットニュース（4月29日）	国際ルートの最終ルートとなり、中断なしの終了。出典：日本 MSN 産経ニュース（4月29日）

表 2：批判的ディスコース分析

	記事の本文と問題箇所	下線部訂正例（案）	CDA
①	中国政府は抗議活動を「ごく少数のチベット独立分子」の <u>仕業（しわざ）</u> とし、「全世界の人々は北京五輪を支持（しじ）している」と主張（しゅちょう）していますが、パリでは市当局が「パリは人権を擁護（ようご）する」という横断幕（おうだんまく）を市庁舎（しちょうしゃ）に掲（かか）げ、アメリカのサンフランシスコでは市議会が「警告と抗議で聖火を迎（むか）える」という決議を可決（かけつ）しています。（読売新聞子供のニュース）	→ <u>による行為</u>	大辞泉（小学館）によると、「仕業」という言葉は、現代用語では、多く人にとがめられるような行為についていう。従って「仕業」という表現を使用することにより、中国政府の独立運動に対する批判姿勢を必要以上に強調しており、公平性を欠く表現であるというのが筆者等の分析である。
②	青と白の帽子とトレーニングウェア姿の中国人警備員たちはロンドンでは約 10 人が投入され、ランナーを妨害しようとした活動家らを排除。英国人タレントのコニー・ハクさんが、沿道から飛び出した男にトーチを奪われそうになった際も、いち早く <u>撃退した</u> 。（読売新聞オンライン）	→ <u>聖火を守った。</u>	「撃退」という表現は、攻めてきた敵などを、逆に攻撃して追い払うことを指し、極めて戦闘的な意味を含有する。中国人警備員が軍の一部であり、攻撃的な手法を駆使したかのような記述である。
③	英国内の中国人は 30 万人前後とされる。関係者によると、西欧諸国の聖火リレーでは妨害が予想されたため、学生組織などの呼びかけで中国人がロンドンに結集。傅瑩駐英中国大使が、聖火リレーでロンドンの中華街を走った際にも、 <u>周囲に陣取り、抗議デモをほとんど寄せ付けなかった</u> 。（2008 年 4 月 7 日 11 時 40 分 読売新聞オンライン）	→ <u>リレーを囲み、妨害から守った。</u> → <u>抗議デモによる影響を最小限に抑えた（軽減した）。</u>	「陣取る」とは、陣地を攻めて奪い合う行動を意味し、戦争用語から派生した表現である。また、抗議デモは、あくまでもデモでしかなく、攻撃的な（暴力による）行動とは異なり、過激な表現が使用されている。

④	<p><u>聖火がチベット自治区を通過する際には抗議行動の再燃も懸念されていた。短縮の背景に政治的意図がうかがえる。</u> (yahoo ニュース)</p>	<p>→<u>聖火リレーは政府の判断により短縮され、チベット自治区においても、問題なく通過した。</u></p>	<p>「政治的意図」の指す意味が不明瞭なまま、さらに「うかがえる」という推量表現を重ねることにより、中国政府の密室性を強調する表現となっている。</p>
⑤	<p>8月に開催する北京五輪を前にした聖火リレーでは、中国当局はチベット自治区を聖火が通過する際、厳重な警備体制で対応に当たる姿勢を見せている。<u>中国政府は「国の団結」を象徴する五輪および聖火リレーを邪魔する動きは断固阻止する構えだ。</u>(REUTERS ロイターネット)</p>	<p>→消去</p>	<p>左記のとおり、消去すべきであるというのが筆者等の訂正案となる。主な理由は、前文が全く同じ趣旨のことを伝えているからであり、敢えて訂正案を出すのであれば、「<u>政府は聖火リレーへの妨害を阻止する姿勢を見せている</u>」となる。国の団結を象徴する「聖火」というのは公平性を欠く表現であると分析する。</p>
⑥	<p>胡錦濤政権は、2005年4月の反日デモのように、<u>無秩序な破壊につながる大規模デモを全力で封じ込める構えだ。</u>・・・だが、歯止めがかからず、AFP通信は19日、市中心部のカルフル前に数百人が集まり、抗議デモを行ったと伝えた。<u>最後は1000人以上の規模に膨れあがったとの情報もある。</u>香港報道では、広東省深セン市でもデモがあったという。(センは土ヘンに「川」)(読売新聞オンライン)</p>	<p>→<u>無秩序な行動に発展しないように警戒を強めている。</u></p> <p>→消去 又は、<u>約1000人の抗議デモが行われた。</u></p>	<p>文脈に問題があるというのが、筆者等の分析である。つまり、無秩序で破壊的なデモは起こっていないにもかかわらず、権力主義が強調されている点と、記事中ほどにある数百名の群集に関する言及の後で、出展不明瞭な報道(情報)を掲載することで、上段の無秩序性の含みのある報道になっている。</p>
⑦	<p>合法的なデモは容認し、妨害行為の防止策を講ずるとというのが国際ルートの各都市の方針だが、<u>対照的に中国国内では独立運動がくすぶる新疆ウイグル自治区を通過する際の騒乱発生を警戒して、事前に市民らを拘束するなどの動きも出ている。</u>(4月5日 MSN 産経ニュース)</p>	<p>→<u>中国国内でも</u></p> <p>→<u>警戒する動きも見せている。</u></p>	<p>「対照的に」という表現であるなら、独立運動の手法の多様性が無視され、全てが合法的であるという視点からの報道となっている。また、ここでいう「市民」とは独立分子で過激なグループを指すのか、一般的市民を指すのかが問題となる。</p>

⑧	<p>世界5大陸21都市を巡る聖火リレーによって、<u>威信を国内外に誇示しようとした中国政府の目算は完全にはずれた</u>。・・・各都市で、妨害行動以上に異様な印象を与えているのは、聖火ランナーの前後左右を固めるように並走する青いスポーツウェア姿の<u>中国人集団</u>である。・・・《<u>国際基準はずれた中国流</u>》・・・北京五輪組織委員会は「聖火随行員」と呼び、中国外務省は「学生ボランティア」だという。しかし、「聖火の管理を行う」との<u>名目で中国から派遣されたこの青い軍団</u>は、<u>ロンドンやパリのような国際都市で、そこがあたかも中国であり、自分たちに法執行の権限があるかのように傍若無人にふるまう姿が目についた</u>。</p> <p>(日本 MSN 産経ニュース)</p>	<p>→<u>発展した現代中国を世界にアピールしようとした中国政府の期待が裏切られた結果となった</u>。</p> <p>→<u>強い</u></p> <p>→<u>中国人リレー併走チーム</u>。</p> <p>→消去</p> <p>→<u>との原由で中国から派遣された聖火併走チーム</u>。</p> <p>→消去</p>	<p>全般の記事は、「威信」「目算」「中国流」・・・などの語彙を使って、中国が世界に恐怖と不安を煽るイメージを顕著に表現しているだけではなく、「軍団」などの語彙で軍事的な行動であるかのように強調したが、それは聖火を守るための併走チームに過ぎないという中国の派遣理由とは大きな隔たりを見せている。聖火は軍事とは全く異なるオリンピックを盛り上げる行事である。報道という点では、公平性に著しく欠ける。</p>
---	--	---	---

これらの一連の報道分析から幾つの特徴が見えてくる。先ず明確なのは、顕著な軍事態勢や戦闘態勢的な語彙表現の使用による擬物法的なレトリックが使用されているということである。擬物法とは、隠喩の一種であり、誇張法も関係があるが、例としては「黒幕」や「踏み台」「ブルドーザー」といった語彙を用いつつ人やその行為を表現する修辞法である^{xvii}。記事②で用いられている「撃退」という表現であるが、その行為には必ず武器が存在する。それが日常生活で使われる表現（例えば、害をもたらすカラスや鳩、その他害虫の駆除等）においてさえも道具を用いた手法である。②において聖火リレーを守るために武器が使われたのでないのは明らかである。その行為によって怪我人が出たという報道はされていないのも明らかであるが、仮に「青と白の帽子とトレーニングウェア姿の中国人警備員たち」が武術的なもので武装しているといった事実も存在しない。また、記事⑧にある「青い軍団」に関しても同じことが言える。軍団であれば、武装していることを意味し、軍事的な意味が強調される。記事③においても、「陣取る」という表現がある。これは例えば出陣や陣地等に見られるとおり、領地をめぐる政治的・軍事的なニュアンスの強い表現であるだけであるだけでなく、歪曲表現でもある。恐らくは、英国で就学中の留学生達が、母国への誇りから聖火リレー妨害の影響が無いようにと守ろうとした

^{xvii} 野内良三(2000)「レトリック辞典」(図書刊行会、pp.95-96)

行為の描写に軍事的含有の強い表現がなされていることは、公平性に欠けると言えよう。直接的な擬物法とは呼べないものの、誇張的表現であることは確かである。

日本語報道において次に挙げられる修辭的特徴は、疑惑法であろう。疑惑法は、話し手や書き手が優柔不断、慎重さなどの何らかの理由を以って、語彙の選択にためらいを持たせたり、決断を保留したりする際の表現法なのであるが^{xviii}、例えば、記事①においては「仕業」、記事④においての「政治的意図」などの表現は、明確な結論を求めず、曖昧とした論述を意図的に用いたものと言えよう。こういった表現で、中国政府の密室性を協調し、暗喩的批判を行っていることも報道の公平性に疑問が残る。また記事⑥に見られるように、「最後は 1000 人以上の規模に膨れあがったとの情報もある。」という不明瞭な情報源を追加することで、中国政府の抗議デモに対する無力を示唆し、デモの正当性の強化を図っていると言える。含有のあいまいさという意味において、これらの記事では、疑惑法的なレトリックが使われているといえよう。

更には、類義語累積法により強調を試みているケースもあった。記事⑤においては、「中国当局はチベット自治区を聖火が通過する際、厳重な警備体制で対応に当たる姿勢を見せている」という記述の直後に「中国政府は『国の団結』を象徴する五輪および聖火リレーを邪魔する動きは断固阻止する構えだ。」としており、段落を用いた反復法である。(当局) → (政府)、(厳重な警戒態勢) → (断固阻止) と使用語彙を変化させているが、新しい段落では、前内容に畳み掛けるように語気を強めている^{xix}。

最後に、我々読者がネットニュースを読む際に気をつけなければならないのは、言うまでも無く信憑性である。記事⑥において、中国政府が事前に拘束しようとする「市民」とはどういった人間を指すのであろうか。素直に読んでしまうと、どうしても一般市民に対する中国政府の威圧を感じざるを得ない。また記事⑧で言われる「国際基準」とは何を意味するのか。加えて「ロンドンやパリのような国際都市で、そこがあたかも中国であり、自分たちに法執行の権限があるかのように傍若無人にふるまう姿が目についた。」とあるが、どのような行動を具体的に指し、傍若無人と表現しているのかなど、不明瞭で客観性を欠く記述となっているだけではなく、誇張法がレトリックとして導入されていることは明白である。ただ、野内(2000)によると「誇張法は『嘘っぱい』ということが受け取り手に感じ取られなければ文彩として成立しない」^{xx}としている。この意味においては、筆者らの分析は疑問が残るところであるが、「一筋縄でいかないのが言葉による伝達だ。大袈裟に言ったほうが自分の伝えたい内容が効果的＝印象的に相手に伝わることもある」^{xxi}ということからも記事⑥の表現は誇張法であると分析する。

ひとつ言えることは、報道における表現が、認知的不協和理論的^{xxii}な効果を生んだこと、そして、Noelle-Neumann のいう、沈黙の螺旋現象^{xxiii}が起り、日本側のマスメディアも西洋的言説に端を発した人権論を基盤に大衆が支持する多数派意見の報道に終始したということであろう。

^{xviii} 野内良三(2000)「レトリック辞典」(図書刊行会、p. 99)

^{xix} 野内良三(2000)「レトリック辞典」(図書刊行会、pp. 314-315)

^{xx} 野内良三(2000)「レトリック辞典」(図書刊行会、p. 116)

^{xxi} Ibid. (p. 117)

^{xxii} Cognitive dissonance theory のことで、認知要素間の矛盾や食い違い(不協和)によって生じた不快感や緊張感を低減するために、人は不協和になった認知要素の一方を変化させようとする傾向があるという議論。松井・上瀬(2007)社会と人間関係の心理学、p.85 より抜粋。

^{xxiii} Spiral of silence model のことで、孤立を恐れて多数派意見に流れる傾向のある心理が螺旋状に大きくなり権力的作用をするという理論。松井・上瀬(2007)社会と人間関係の心理学、p.84 より抜粋。

VII. おわりに

古代より「火」は、文明や生命力の象徴とされ、宗教行事にも頻繁に利用されてきた。数年前にお亡くなりになったが、原爆の火を人類の記憶として 59 年間守ってきた人も存在した^{xxiv}。オリンピックにおける聖火リレーという極めてシンボリックなもの、強いて付け加えるなら、「火」という、消してはならないもの、人類を明るく照らす「平和の象徴」が、ローカルなものであったはずのチベット騒動を機にナショナルなものへ、そしてトランスナショナルな人権抗議運動にまで発展したのである。現代国際社会におけるマルチメディアは、ひとつの意味が生産された場合に強調されながら越境化されてゆく。これもグローバリゼーションの一現象（仕業）^{xxv}ではないだろうか。この意味で、日本の巡礼終着地点的な存在でもある善光寺がリレー出発地点としての提案を破棄したことは、日本の仏教文化の歴史的見地からは、中国政府に対する明らかな全面否定であったにもかかわらず、明言を避けた日本政府はサミットを目前としていた日中関係を優先した消極的否定に留めたのである。

またオリンピック自体は平和の象徴でありながらも、それ故政治的な色合いを強く残す。即ち、冷戦中・冷戦後ではオリンピック開催に大きな相違点がある。1998 年冬の長野オリンピック開会式で掲げられたボスニア・ヘルツェゴビナの旗もそうであったように、シドニー五輪でテーマとされた民族的アイデンティティ（特にアボリジニ文化）という点からは、チベット独立運動に端を発した暴動鎮圧行動が非難されたことは自然な流れともいえる。日中の報道比較からも国際関係を垣間見るきっかけとなった。聖火リレーの妨害者は多種多様な人々によって行われたのであるが、中国側報道からは見えてこない部分であった。

本研究を通じて、明らかになったことは、ネットニュースという極めて不安定な^{xxvi}メディアにおける権力作用、ということに集約される。伊藤（2002）は、9.11 のテロ事件に触れ「ある状況が定義され、そしてそれ以外の定義が許されない仕組みが構造化されていった」過程の中でメディアの社会的主体性について述べたが^{xxvii}、2008 年北京オリンピックの聖火リレー報道においても同じことが言えるのではないだろうか。つまり、チベット暴動の鎮圧から「中国＝人権無視の権力主義国家」という言説が成立し、「国境なき記者団」のアテネでのキャンペーンをきっかけにこの定義以外の切り口は許されず、日本を含めた西側諸国の中で構造化したと考えることが出来る。加えて善光寺のスタート地点拒否により、日本ではより一層宗教的な意味合いも追加されたのである。しかもその言説構築の仕組みはネットニュースではかなり巧みで、疑惑法や誇張法というレトリックで、時には真実とは言いがたい出来事も含まれる報道までなされたという事実は否定できない。

^{xxiv} 山本達雄氏死去 「原爆の火」保存者 (<http://www.47news.jp/CN/200405/CN2004051201002343.html>)

^{xxv} 表 2、①を参照のこと。

^{xxvi} ここで言う「不安定」とは書き換え可能なメディアであることを意味する。

^{xxvii} 伊藤守（2002）「メディア文化の権力作用」（せりか書房、p.10）

参考文献

- 伊藤守（2002）『メディア文化の権力作用』せりか書房 p.10
- 清川正二（1987）『スポーツと政治』ベースボール・マガジン社 p.234
- 野内良三（2000）『レトリック辞典』図書刊行会 pp.95-96、p. 99、p. 116、pp. 314-315
- 野内良三（2000）『レトリックと認識』日本放送出版協会、p. 10
- 松井豊・上瀬由美子（2007）『社会と人間関係の心理学』岩波書店、pp84-85